

Denis Devlin によるフランス詩翻訳： モダニズム変容の一例として

鈴木 哲平*

1. はじめに

20世紀のアイランド詩が W. B. Yeats (1865-1939) とともに幕を開けるということに異議を唱える者はいないだろう。ケルト復興、象徴主義から出発した Yeats は、モダニズム、政治参加、オカルトなど、時代の変化に応じつつ作風を変化させ、20世紀初頭のアイランド詩、英語圏詩を代表する存在である。

19世紀末から20世紀にかけてあまりに大きな存在であった Yeats のおかげで、同時代の詩人としては、Lady Gregory (1852-1932) や J. M. Synge (1871-1909) を除くと、あまり著名な詩人は存在しない。とはいえ、1910年代には、いわゆる戦争詩人たちとともに、Thomas MacGreevy (1893-1967) や Austin Clarke (1896-1974) らが、次世代の詩人として活動を始めた。

1930年頃になると、1900年代生まれの詩人たち、すなわち Patrick Kavanagh (1904-67), Brian Coffey (1905-95), Samuel Beckett (1906-89), Denis Devlin (1908-59) らが活動を始め、新しい時代の到来を感じさせるようになる。いわゆる「レイトモダニズム」の世代であり、隣国イギリスでは、W. H. Auden (1907-73) らが、政治参加を視野に入れた活動を行い始めていた。

上に挙げたアイランド詩人たち、その中でも Coffey, Beckett, Devlin らは、イギリス詩壇と

は異なり、James Joyce (1882-1941) の影響下、複数の西欧語に通じており、英語圏とともにヨーロッパ大陸の文学に近い詩人であった。彼らの大きな特徴は、フランスやイタリア、ドイツ、スペインの詩を自ら翻訳しているところである。

*

ところで彼らにとって、西欧文学の中でも、とりわけフランス詩の位置づけは大きい。Charles Baudelaire (1821-67), Arthur Rimbaud (1854-91), Stéphane Mallarmé (1842-98), そしてシュルレアリスムに至る1860年代から1930年代までの約80年間、フランス詩は欧米文学史の中で重要な位置を占めていた。当然ながら、英詩も、そしてアイランド詩人たちもその大きな影響を受けていると考えられる。

1930-40年代のアイランド詩を考える際に、この問題は不可避であると言える。彼ら、その中でも特に Devlin はフランス詩の英訳を数多く残している。とりわけ Paul Eluard (1895-1952), André Breton (1896-1966), Saint-John Perse (1887-1975), René Char (1907-88) ら、シュルレアリスム世代の詩人が多い。

しかし、フランス詩がいかに翻訳され、また受容されたかという問題については、これまでほとんど研究されてこなかったと言える。本稿は、この方面の研究に一筋の光を当てたいと考えている。

具体的には、アイランド詩人 Devlin によるフランス詩人 Saint-John Perse の詩 “Exil” (英訳: “Exile”) を検討し、Devlin におけるこの翻訳の

2018年11月30日受付

* 江戸川大学 基礎・教養教育センター准教授 英語文学

意義を考えることである。その際、Devlin の一世代前の代表的英語圏である T. S. Eliot による Perse の詩 *Anabase* (英訳: *Anabasis*) の翻訳を参照し、モダニズムにおける時期の問題と、「越境」の変質の関係を探ってみたいと考えている。

2. フランス詩人 Saint-John Perse

Saint-John Perse は風変わりな詩人である。フランス海外県のグアドループに生まれ、育ち、フランス本土(ボルドー大学)に学んだ後、1914年外交官となる。この時点ですでに詩作を始めており(“Eloges”), また、中国赴任中には *Anabase* (1924) を執筆した。第二次大戦のフランス降伏に際し、アメリカに亡命し“Exile” (1942) を書く。以後もアメリカに滞在した。1960年にはノーベル文学賞を受賞。

このように Perse はフランス本土に長く滞在するのではなく、その人生において、様々な土地に移り住んでいった。グアドループ、アジア、アメリカ……。外交官であったこの詩人自身が、やはり外交官であった Devlin に通じるような、「越境」の詩人であったことは、まず注目すべき事柄であるだろう。

ただし、Devlin との違いとして、Perse 自身は一貫してフランス語詩人であり、翻訳や外国語による執筆——つまり言語的な「越境」——を経験した詩人ではない点は、合わせて注目すべき点であろう。

彼の詩は、特に *Anabase* 頃までの時期、世界を「讃える」肯定的な感情が一貫して表現されている。また語彙については、単純だが力強い形容詞を多用している。一方で、普段の生活ではあまり用いない植物学や、神話のモチーフを用いている⁽¹⁾。

また、興味深いのは、20世紀前半には高名な詩人であったにもかかわらず、フランス詩人、フランス文学研究において、現在 Perse の詩はあまり広く読まれていないという点である。世代的にはシュルレアリスムと同時代人でありつつ、Breton に「遠くにいるシュルリアリスト」と言

わしめた詩人を、同時代の詩人がどう読んだか、という問題も興味深い論点ではある。

3. T. S. Eliot の *Perse* 訳

T. S. Eliot は 1930 年、Perse の *Anabase* を翻訳し、*Anabasis* として出版した。*Anabase* はギリシャ語起源(ἀνάβασις)のフランス語であり、クセノフォン(BCE 427-BCE 355)に『アナバシス(遠征)』という従軍記があるが、これは Perse の詩作の内容に直接的な関係はない。Perse の詩はむしろ現代の叙事詩であり、「中央アジア的茫漠の荒野の征服、古代東方の任意の都市と文明の崩壊と建設」⁽²⁾であり、「遠征というよりは、冒険への嗜好」(アラン・ボスケ)であると考えるべきだろう。

Perse の詩とそれに対応する Eliot 訳から、2か所を引用してみよう。

(S-J Perse)

C' est là le train du monde et je n' ai que du bien à en dire - Fondation de la ville. Pierre et bronze. Des feux de ronces à l' aurore mirent à nu ces grandes pierres vertes et huileuses comme des fonds de temples, de latrines, ... (IV)

(...)

Terre arable du songe! Qui parle de bâtir? - J' ai vu la terre distribuée en de vastes espaces et ma pensée n' est point distraite du navigateur. (X)

(Eliot)

Such is the way of the world and I have nothing but good to say of it. - Foundation of the City. Stone and bronze. Thorn fire at dawn Bared these great green stones, and viscid like the bases of temples, of latrines, ... (IV)

Plough-land of dream! Who talks of building? - I have seen the earth parceled out in vast

spaces and my thought is not heedless of the navigator. (X)

IV の歌では、荒野が征されたのちに、そこに都市が築かれるところが描かれ、X では荒野の征服、都市の建設を達成し、これを祝いながら、さらに海への冒険への暗示を示しつつ、この詩は閉じられる。

Eliot 自身が序文で書いているとおり、*Anabase* はフランスだけでなくヨーロッパに広く知られ、Hofmansthal によるドイツ語訳、Ungaretti によるイタリア語訳がなされている。Eliot 自身は、これを Joyce の “Anna Livia Plurabelle” (のちに *Finnegans Wake* として刊行されるテキストの、先行出版されたその一部) に匹敵する価値のあるテキストだと評している。また、翻訳の改訂に際して (1949) は、Perse の名声はさらに上がり、「アメリカの同時代詩に関心のあるすべての人に知られて」おり、翻訳改訂は時宜を得ていると述べている⁽³⁾。

4, Devlin の Perse 訳と Devlin の詩作

いよいよ Devlin による Perse 訳の話に入っていきたいと思う。Devlin が英訳に選んだ Perse の詩は “Exil” という、1942 年に書かれ出版された作品である。

Perse は、第二次大戦におけるフランスの対独降伏・協力に際してアメリカに亡命し、亡命先でこの詩を書いた。それまでの Perse の詩が、世界の賛美や肯定を主調としていたのに対し、本作は、1930 年代の世界情勢、そしてそれに関わる外交官としての苦悩を含んでおり、作風は大きく変化していると言える。

ここでもやはり、原詩と翻訳を掲げてみたい。

(S-J Perse)

Que de convoiter l' aire la plus nue pour assembler aux syrtes de l' exil un grand poème né de rien, un grand poème fait de rien ...

(…)

J' ai fondé sur l' abîme et l' embrun et la fumée des sables. Je me coucherai dans les citernes et dans les vaisseaux creux,

Et tous lieux vains et fades où gît le goût de la grandeur. (II)

… Tais-toi, faiblesse, et toi, parfum d' épouse dans la nuit comme l' amande même de la nuit.

Partout errante sur les grèves, partout errante sur les mers, tais-toi, douceur, et toi, douceur, et toi présence gréée d' ailes à hauteur de ma selle. (VII)

(Devlin)

To desire the barest place for assembling on the wastes of exile a great poem born of nothing, a great poem made from nothing ...

(…)

I have built upon the abyss and the spindrift and the sand-smoke. I shall lie down in cistern and hollow vessel,

In all stale and empty places where lies the taste of greatness. (II)

… Be silent, weakness, and you, beloved fragrance in the night like the very almond of night.

Wandering all over the shores, wandering all over the seas, be silent, gentleness, and you, presence, arrayed with wings at my saddle' s height. (VII)

“wastes”, “nothing”, “sand-smoke”, “hollow”, “empty” といった語が目立ち、ぼんやりとした不安な世界が描かれる。また、poem, poetry や詩作したいが詩のテーマとなり、より自省的な傾向を強めていると言える。

ここで、Devlin が翻訳と同時期に執筆した詩集 *Lough Derg* (1946) を見てみたいと思う。そ

こには、訳詩に共通する特徴が見られるように思われる。

My room sighs empty with malignant
waiting;

The November wind slows down outside,
wheeling

Twig and awning on the brick balcony,

A wind with hackles up. In Rome at evening

Swallows traced eggshapes on the vellum
sky.

The wind was warm with blue rain in
Dublin;

When the culture-heroes explored the nether
world

It was voiceless beasts on the move made
Death terrible.

The famous exile' s dead, from many on
many

Deportations, from Spain to Prague to Nice,

Kaleidoscopic police, his Danse Macabre;

One of the best the worst had never feared.

("From the Government Buildings")

Phrases twisted throughother

Reasons reasons disproofs

Identity obscured

Like mirrors shining throughother

Reasons reasons disproofs.

(…)

I am blown blown gone foolish

This lung-exhalation

Of now impotent angels

Is useless to usage.

("Est Prodest")

"From the Government Buildings" では直接 "exile" の語が用いられ, "Est Prodest" では,

"obscured", "disproofs", "blown gone" といった語が散見され, より茫漠とした世界が描かれる。Devlin の前詩集にあたる *Intercessions* (1937) では, より難解な語彙, 複雑なシンタクスが用いられている。もちろん, 第一義的には, 10 年間のさまざまな経験, 読書などによって Devlin の作風が変化したと考えられるが, 詩人=外交官の先達としての Perse が "Exile" を書き, Devlin がこれを読み, 翻訳する過程で Perse の詩の言葉が, Devlin に染み入っていったと考えることも, 必ずしも否定できないと思われるのである。

影響関係を示すことは一般的に論証が難しい。とはいえ, Perse の翻訳を補助線として Devlin の詩作を読むことで, さらに, Eliot 英詩を合わせて考えることで, 英詩のモダニズムに対しての新しい解釈を見出す可能性を探ってみたいと考えているのである。

5, 結 語

Perse, Eliot, Devlin はいずれもモダニズム期の詩人である。また, Perse はグアドループに生まれフランス, アジア, アメリカ等を転々とした。Eliot はアメリカからイギリスに移住, 帰化し, Devlin もアイルランドに生まれつつ, 外交官として移住生活を続けた。その意味において, 彼ら 3 人はいずれも国境を越えた詩人であり, 彼らの詩作品の土台には, 「越境」の精神があるということがあると言えるだろう。

フランス語に安住した Perse, アメリカからイギリスという「大国」を舞台に活躍した Eliot に比して, アイルランドに生まれ欧大陸で過ごした Devlin にとっては, 「越境」の意義も異なるだろう。すなわち, 英語を受容しながら, そのイギリスから独立し, アイルランド同様カトリック国であるフランスを中心に欧大陸に滞在した詩人にとって, 「越境」の意義は複雑であり, より注目が必要となろう。

先述したとおり, Devlin はきわめて多くのフランス詩を英訳した (ドイツ語の英訳, イタリア語の英訳もある)。Eliot による Perse 詩英訳も画

期的な仕事ではあるが、ハイモダニズム期（1910-20年代）の詩人は、レイトモダニズム期（1930年代）の詩人ほど翻訳を行ってはいなかった。30年代の Devlin, Beckett, Coffey は、複数の西欧語に通じ、国民文学から汎欧文学への移行、のちの世界文学への端緒とも言える姿勢を見せている。これは、モダニズムの中でも大きな変化の一つだと言えるだろう。

Eliot が、1949年に Perse の *Anabase* の翻訳を改訂しているのは示唆的である。彼はおそらく、1940年代にも盛期モダニズムのスタイルを保持していたと想像される。Eliot は、*Anabase* に見られる世界の破壊と創造のダイナミズム、世界についての知識への肯定的なまなざしを保ち続けていたと言えるだろう。

一方で Devlin は、当時支配的だった英語圏（イギリス）の影響を相対化し、欧大陸やアメリカとの関係を結びつつ、「越境」の美学、「翻訳」を追求したと考えられるだろう。

参考文献

- Bosquet, Alain, *Saint-John Perse*, Paris: Seghers, 1964.
 Devlin, Denis, *Translations into English*, (ed.) Roger Little, Dublin: Deadalus, 1992.
 Devlin, Denis, *Collected Poems*, (ed.) JCC Mays, Dublin: Deadalus, 1989.
 Perse, St.-John, *Anabasis*, (tr.) T. S. Eliot, London: HBJ, 1938 [1977].
 サン＝ジョン・ペルス『サン＝ジョン・ペルス詩集』多田智満子編訳、思潮社、1975。

《注》

- (1) Bosquet, Alain, *Saint-John Perse*, Paris: Seghers, 1964.
- (2) サン＝ジョン・ペルス『サン＝ジョン・ペルス詩集』多田智満子編訳、思潮社、1975。
 リュシアン・ファーブルはこの10セクションから成るこの詩に、以下のような小見出しをつけている。
 - 1, 都市を建設すべき地への征服者の到着
 - 2, 都市計画の熟考
 - 3, 占いに計る
 - 4, 都市の建設
 - 5, 新しい探検と征服への焦慮と渴望
 - 6, 建設と征服の計画
 - 7, 出発の決意
 - 8, 荒野を横切つての行進
 - 9, 茫大な新しい国の境界への到着
 - 10, 歓喜, 祝祭, しかし今度は海路による別の出発が目前に迫っている。
- (3) Perse, St.-John, *Anabasis*, (tr.) T. S. Eliot, London: HBJ, 1938 [1977].

